

第8回藤原正彦エッセイコンクール入賞作品 講評
(審査員 藤原正彦姫路文学館長)

【中学生部門】

最優秀賞「ウソ」(藤澤幸示さん)

素直で簡潔な文体、そして非常にリズムがある。私の父、作家の新田次郎は、私が初めてのエッセイ集『若き数学者のアメリカ』(1978年)を書いている時、一つの文章は必ず原稿用紙の5行以内に収めるよう厳しく言ったものだ。文章は短い方がリズムが良く、読者を引っ張る。この作者はそれを本能的に知っている。

冒頭の「僕はよくウソをつく。ウソをつきたいと思ったことは一度もないのにウソをつく」のすぐあとに、夏休みの宿題をやると母に約束したのに結局できなかったことから「僕の朝の話はウソになった」と書く。「ウソをつく」「ウソになった」と韻を踏んでいるあたり、文才がある。

谷川俊太郎の絵本からの引用部分は、ちょっと自分に都合が良すぎるが、これも文章を書くうえで一つのテクニックになる。

「ウソで誰かを救うこともあると思う。でも、他人を傷つけるウソをつくことは、絶対にいけないと思うし、そんなことはしたくない」。日本人にとって“正直”よりも“思いやり”の方が重要だということは世界中の人が理解できない話だが、論理だけで突き進んできた欧米主導の世界を改めるには日本人の持つ“惻隱の情”が必要である。作者は、そうした深遠な哲学を、中学1年生でもう持ち得ている。大したものだ。最後もユーモアを交えたうまい終わり方である。

優秀賞「忘れられないありがとう」(吉武歩花さん)

お母さんに、むかしやっていた販売の仕事について尋ねてみた作者。何となく「レジって大変なのかな」くらいの気持ちで聞いてみたところ、じつは感動的なエピソードがあったことを知る。どんな仕事にも感動ややりがいといったものがあるという発見をしている。なかなか良い作品だと思った。

佳作「四万十川の魔法」(虎島佑奈さん)

夏休みに父の提案で出かけた四万十川。行くまでは、勉強や課題で忙しいのに、と乗り気ではなかった作者だが、川下りを通して身も心も洗われるような気持ちに浸り、自然と交わって感性を磨くことがいかに重要かということを知る。自然と戯れることは、美的感受性を高め、将来の独創性、物事の発見につながる。素晴らしい体験だったと思う。

【高校生部門】

最優秀賞「二枚目の貸出券」(白羽佑果さん)

展開が非常に巧みでテンポも良い。小学生の頃の自分を慈しむ情緒があふれている。

高校生になってほとんど本を読まなくなってしまった私に向かって、小学生の時の図書館の貸出券が「そんなのダメ！」と語りかける。「ひらがな書きの「わたし」が」とはうまい表現。そして、借りたい本を探す経緯が語られたのち、「新たな本に出会うことが、こんなに心を躍らせるものだったなんて。ありがとう、貸出券」と、最後にまた冒頭の「貸出券」の話題に戻している。これはエッセイの一つのテクニック。新しい本に巡り合えた喜びもよく出ている。「ありがとう、小学生の私」も非常にいい言葉だ。小学生の時の貸出券という何でもないものに目をつけて見事にまとめた。これも才能なのだろう。

優秀賞「家族の歴史」(藤原あかりさん)

お盆に祖父母宅で古いアルバムをひもといた時の体験。まず現れた愛くるしい赤ちゃんの写真に「思わずかわいいと言ってしまったが、その赤ちゃんは私の父だった」とユーモアを利かせる。同じ小中学校に通った祖父母や叔父叔母、「ご先祖さま」である高祖父母、曾祖父母の写真との対面を経て、作者は、現代は写真も動画も簡単に残せるが「色やにおい、手触り、手書きのメモなど本当に味わい深いものが残せない」という重要なことに気づく。「だから面倒だけれど、写真をアルバムに残そうと思う。未来で思い出を語る日まで」とは、素晴らしい見識である。

佳作「あの日と目が合った」(前田乃愛さん)

祖父母が引っ越すことになり自分の荷物を引き取りに行った作者。今では小さくなったサンダルや道路に絵を描いたチョークなど、これまで何とも思わなかった一つ一つに懐かしさがこみ上げ、お別れの悲しみが湧いてくる。素晴らしい感性である。そのうち1枚の絵を見つける。それは9歳までの日々を留めておこうと10歳の誕生日の前日に描いた自画像だという。鋭い感覚の作品。ただ、後半が理屈っぽくなってしまった。この二つを混ぜるとそう簡単には両立しない。

【一般部門】

最優秀賞「味噌蔵の魔法使い」(高山恵利子さん)

これはもう、うますぎる。欠点が全くない。

書き出しは、いつも代わり映えしない姿、ぶっきらぼうで粗野な祖母を、この村のように平凡で退屈な人生を送ってきた気の毒な人、となかば憐れむかのよう。ところが、味噌蔵での祖母を見てそれは一変する。「差し込む光まで染めゆくような、強烈で濃厚な生

きている味噌の香り。解き放たれユラユラと広がりゆく香りの先端までもが見えるようだった」と素晴らしい描写で味噌蔵の暗さや匂いを表現。方言も非常に効果的である。「密やかに日々変化する者の姿は、見ようとしなければ見えない。言葉を持たぬ者たちの声は、聞こうとしなければ聞こえない」という文章もいい。素晴らしいものを生み出す祖母を目の当たりにして、それまでの憐れみが尊敬に変わり、作者の「この村に居たい」という気持ちに文章全体が収斂してゆく。

味噌蔵を祖母と幼い作者が出てゆく最後の場面には、祖母への温かい気持ちと懐かしさがよく出ている。モンペに風をはらませ、がに股で歩く祖母と、幼い作者。私はこれを読んだ時、クロード・モネの絵「日傘をさす女」を思い出した。

優秀賞「あのね」（柴田えみ子さん）

末期がんに侵されながら終末治療を拒否し、自宅で最期を迎えた母親について書いた感動的な作品。むかし習ったピアノで覚えている曲を全部弾きたい、という母親は、最後に父親も大好きだったという「月の砂漠」を小さく歌いながら弾いた。「月の砂漠」の歌詞は作中には書かれていないが、金の鞍をつけた王子様と銀の鞍をつけたお姫様が黙って月の砂漠をとことこと歩いていくという大変ロマンティックな歌。母親には、もうすぐ天国のお父さんと一緒に歩いてゆけるんだ、という思いがあったのだろう。素晴らしい終わり方である。最優秀賞になっていい作品だが、「味噌蔵の魔法使い」がうますぎた。

佳作「外国のノート」（鍋島えりさん）

自身が日本語を教えるベトナム人技能実習生との心の交流を描く。最初は「信じられないほど勉強が嫌い」な彼らに手を焼き「私は何度教室を飛び出そうとしたことか」と、かつて抱いていた腹立ちを素直に書いている。しかし、色んな実践を通して作者と彼らとの間に良い関係性が出来ていったことが、非常にうまく表現されている。多少文学少女のようなにおいがした点がマイナスになったが、達者な文章である。